2021年度　成安造形大学附属近江学研究所　紀要　第11号

下仰木の「十王堂」
―地域のお堂が果たす役割―

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長
加藤　賢治

下仰木の「十王堂」
―地域のお堂が果たす役割―

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長　加藤　賢治

Name:
Kenji　KATOH

Title:
“Juou-do” in Shimoogi: The Role Played by Local Temples

Summary:
In the Ogi district of Otsu City, there is a temple called “Juou-do” which enshrines the Ten Kings, judges who decide the fate of the dead based on their actions during their lifetimes. While unraveling the tradition of the Thirteen Buddhas (a belief peculiar to Japan that is accompanied by memorial services for the repose of the deceased) from that of the Ten Kings, we consider the significance and role of the temples and the community of people who gather there.

はじめに

新型コロナウイルス（COVID-19）の脅威がまだ冷めやらぬまま二〇二二年を迎えた。日本国内では、一旦落ち着いているかと思えた感染拡大も、ここに来て第六波の入り口に差し掛かったといわれ、海外では、オミクロン株やデルタ株が猛威を奮っている。死者が目の前に溢れるような惨状はありえないかもしれないが、コロナ以前のような行動は、控えなければならない状況が続いている。

百年前のスペインインフルエンザや、近世、近代初頭のコレラ、古代の天然痘などの感染症の蔓延は、日に日に死者が増加し、人口密集地ではまさに地獄の様相を呈していたといわれる。

一方で、現代の感染症は、医療の進歩によって、ワクチンの開発、量産などで過去に繰り返されたような惨状は免れているのかもしれないが、行動制限による経済活動の停滞が、特に社会的弱者にとって脅威となっている。すなわち、広く社会がつながっている成熟したグローバル資本主義経済社会においては、目に見えない新型ウイルスの存在が、先の見えないことへの不安、そこからわき起こる恐怖へと連鎖している。

近代以前には、感染症以外にも、戦乱や飢饉などが頻繁に起こり、不安定な世の中が続いたと想像されるが、民衆はどのように乗り越えてきたのであろうか。

その手がかりとなるお堂が、大津市仰木地区下仰木にある「十王堂」である。ここには、閻魔王を中心に中国から伝わったとされる十王思想に基づく「十王」の木像が並び、また、地獄が描かれた掛け軸（三幅）が所蔵されている。

本論では、この十王堂における民俗行事を検証することで、そこから見えてくる集落の暮らしを眺めつつ、厄難を乗り超えてきた知恵を探ってみたい。

写真１　下仰木十王堂外観

写真２　十王堂内部

第一章　下仰木「十王堂」

（一）下仰木「十王堂」と東光寺の歴史

大津市仰木地区下仰木にある「十王堂」は、大津市仰木七丁目二－一に位置する。県道三一三号線に面し、現在の仰木地区の東の入り口にあたる。

堂内には、正面にひときわ大きな閻魔王が鎮座し、その左右に秦広王、初江王、宋帝王、五官王、変成王、泰山王、平等王、都市王、五道転輪王のいわゆる十王が配置されている。加えてそこには、三途の川で亡者の衣服をはぎ取る奪衣婆と、亡者の罪状を読み上げ、判決文を記録する書記官である司録と司命が並んでいる。

以前、このお堂を見学した時には、地獄絵が描かれた掛け軸三幅が掲げられており、お盆の時期には、大勢の地域の人々がここを訪れ、閻魔王の前で、地獄絵の絵解きが行われていたという話を伺った。

今回、この十王堂の沿革を知るため、下仰木地区の檀那寺である霊雲山東光寺の住職である志井浩順氏を訪ねた。

志井住職によると、十王堂は確かに東光寺との深い関わりを持つが、開基については、その言い伝えも含めて、資料が残っていないとのことであった。現在の建物は、昭和五十二年に下仰木の住民有志によって建て替えられたということは確かで、古老の話によると、かつてのお堂は茅葺で、堂内は煤で真っ黒になっていたという。

明治期に記された仰木村誌には、東光寺の沿革が記されているので、それを参考にすることができる。十王堂の横に「無縫塔［註1］」と呼ばれる塔の頭の部分が丸くなっている僧侶の墓石が数個並んでいる。かつて、このお堂は、住職がいるお寺であった可能性もあるとのことであった。

仰木村誌によると、東光寺は、国宝の六道絵十五幅を所蔵する大津市比叡辻の聖衆来迎寺の末寺で、真玄上人の開基である。真玄上人は、文亀元年（一五〇一）に生まれ、永正十六年（一五一九）の秋に十九歳にして剃髪受戒し、大永七年（一五二七）の秋に来迎寺に入山。天文二十二年（一五五三）に寂すと伝えられている。そこから類推すると、東光寺は享禄年間（一五二八～）あるいは、天文年間（一五三二～）頃の草創ではないかと考えられる。

写真３　十王堂の地獄絵（三幅の掛軸）と獄卒・業秤・善悪人頭杖の木像　倉田成博氏撮影

東光寺は中世の草創であるが、開基である真玄上人以降、記録に残る範囲で盛祐、盛久、盛音、盛性、道覚、曳久、鎮舜、円照、寂忍、諦忍、理善、理定、理性、戒定、真栄、覚秀、恵順、圓定、そして現在の住職につながっている。特に、中興といわれる曳久の次々代の円照の時、延享二年（一七四五）に、台所普請として庫裡が建てられた。その次の住職である寂忍上人には、後述する「首切地蔵」の伝説が伝えられるなど、おそらく十八世紀の江戸時代中期頃から、東光寺をはじめ、十王堂の行事などが盛んに行われるようになったのではと推測される。

写真４　十王堂横の「無縫塔」と呼ばれる僧侶の墓石

（二）首切地蔵

現在、県道三一三号線に接する、東光寺の門前に「首切地蔵」と呼ばれる石仏が、東に向いて安置されている。十代目の住職である寂忍上人が発願されたということであるが、『ふるさと仰木－古老が語る－』の「首切地蔵［註2］」の項を見てみると、寂忍

写真５　東光寺門前の首切地蔵

上人の時代に、仰木と堅田を結ぶ旧道があり、仰木集落の村人が堅田で米を販売しての帰りに、その金品を狙って頻繁に追いはぎが出たという。文化元年（一八〇四）に寂忍上人が入寂された時、遺言として、追いはぎを改心させる、また仰木の村人の気持ちを和ませるためにも、地蔵さまを安置するようにと伝え残し、文化二年（一八〇五）に仰木から堅田へ向かう旧道に安置された[註3]。

その地蔵さまが、あるとき台風で、裏の天神川に落ちて首が離れてしまった。元の位置に一旦は戻し、首をその上に乗せた。その場に追いはぎが出ると、不思議なことにその首がどすんと下に落ちたという。追いはぎは驚いてその場を去ったので、その後に身代わり地蔵などと呼ばれるようになった。今では「首切地蔵」と呼ばれ、現在の位置に堅田方面を向いて佇んでいる。

写真６　かつて首切地蔵が安置されていた仰木から堅田へ抜ける旧道

伝説はそのように語られているが、地蔵石仏は、境界を守護するという信仰もあり、また、十王信仰の中の閻魔王と習合していることを考えると、仰木集落の東の入り口にあたる下仰木集落の位置と、閻魔王が主尊として安置される十王堂の存在との関連なども気になってくる。追いはぎや、悪党ばかりでなく、疫病の侵入も防いでいたのであろう。

次章では、十王信仰を中心に地獄の思想や地蔵尊についてもまとめてみたい。

写真７　今は使われていない湖西道路を渡る歩道橋。この橋を堅田方面に渡る手前（写真の右手）に首切地蔵が安置されていたという

写真８　仰木に通じる新しい道路と明治26年の改修記念碑。旧道はこの道路の設置以降、徐々に使われなくなっていった

第二章　十王信仰と十三仏信仰

（一）十王信仰

十王信仰は、中国で仏教と民間信仰である道教が混ざって起こり、唐の時代の半ばから後期にかけて成立したと考えられている。十王信仰は、仏教の伝説によると、道明という僧侶が冥界に入って「十王経」を感得したといわれ、『仏説預修十王生七経』に説かれている。道教では人が死を迎えると、冥界に存在する十殿と呼ばれる場所を巡っていくのである。十の殿にはそれぞれ「王」が居て、冥界に訪れた死者の生前に犯した罪を裁いていき、死者はそれを償っていくとされている。また、道教ではそれぞれの王に真君名を付けて身近な神の存在とした。

十殿に居る王は、それぞれ、

初七日・秦広王・太素妙広真君
二七日・初江王・陰徳定休真君
三七日・宋帝王・洞明普静真君
四七日・五官王・玄徳五霊真君
五七日・閻魔王・最勝輝霊真君
六七日・変成王・宝粛昭成真君
七七日・泰山王・玄徳妙成真君
百箇日・平等王・無上正度真君
一周忌・都市王・飛魔演慶真君
三回忌・五道転輪王・五化威霊真君[註4]

と呼ばれ、秦広王から泰山王までは、死後七日ごと

に殿を訪ねて王の裁きを受け、その後は、百日後、一年後、三年後という機会に殿を巡るのである。

このことが記される『仏説預修十王生七経』という仏教経典には「預修」という文字が見え、これは、この世に残された人々が追善のために供養するということではなく、本人が自分のために生前、予め（あらかじ）良い裁きになるように祈っておくということを意味している。概ね月に二回、十王に祈願することで十王の審判を免れることができたとされている。

このように、十王信仰は、中国の民間信仰である道教がその発端であることは間違いないが、この信仰が日本に入ってくると、日本の仏教と習合しつつ、より活発に民間信仰として発展していくことになる。

（二）日本における十三仏信仰

先述の『仏説預修十王生七経』が日本に入ってくると、鎌倉時代の始め頃から仏教的な展開が見られるようになる。具体的には『仏説地蔵菩薩発心因縁十王経』なる経典が書かれ、そこには十王にそれぞれ本地仏として仏の名前が加えられている。これがきっかけとして仏教の中で、十仏事としての追善供養が定着していくことになる。

初七日・秦広王・不動明王
二七日・初江王・釈迦如来
三七日・宋帝王・文殊菩薩
四七日・五官王・普賢菩薩
五七日・閻魔王・地蔵菩薩
六七日・変成王・弥勒菩薩
七七日・泰山王・薬師如来
百箇日・平等王・観音菩薩
一周忌・都市王・勢至菩薩
三回忌・五道転輪王・阿弥陀如来

そして、室町時代のはじめになると、十三仏事として展開される。「弘法大師逆修日記事」（『弘法大師全集』五）によると、逆修（自分のために生前、予め良い裁きになるように祈っておくということ）を行う日と関連づけて、阿閦如来（七回忌）、大日如来（十三回忌）、虚空蔵菩薩（三十三回忌）が追加されている。

「弘法大師逆修日記事」には、その題の通り、「預修」、「逆修」をする日を中心に十三仏事が示されているが、そもそも、逆修は回数や間隔は別として、平安貴族によって盛んに行われており、追善供養も行われていたことが知られている。十三仏を本尊とする追善供養が盛んになるのは、鎌倉時代の末から南北朝時代であると考えられ、室町期に至ってはかなり盛んになっていたことが、石造の十三仏等の遺物から想像することができる[註5]。さらに江戸時代には全国的に庶民に定着し、全国各地の寺院に十王堂や閻魔堂が現存しており、屋外には石仏の十王像が、十王堂内には木造の十王像が祀られている。

また、近年では、西国三十三観音霊場や四国八十八ヶ所の遍路、その他の観音巡りなどに準じて、昭和五十年代から平成十五年にかけて、全国二十箇所の十三仏霊場巡りが開創され、盛んに行われているという報告がある[註6]。

（三）日本における閻魔王と地獄と地蔵菩薩の信仰

日本における閻魔王、地獄、地蔵菩薩というと、浄土教思想と深いつながりがある。そのことについて『成安造形大学附属近江学研究所紀要』第七号「里山の民間信仰　―仰木の地蔵信仰について―」という論考で、筆者は仰木の地名の由来（横川の霊木を仰ぎ見る）となった比叡山延暦寺の北方「横川」の地において、慈恵大師良源（元三大師）（九一二～九八五）の高弟の一人である恵心僧都源信（九四二～一〇一七）が、浄土関係の仏説や諸論、経典から、地獄や極楽浄土に関する記事を拾い集め、『往生要集』を執筆し、「厭離穢土」「欣求浄土」を訴えたことに始まると述べている。

源信は、「六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天）」という魂が転生するという六つの世界を解説し、特に「地獄」の記述に重点が注がれた。『倶舎論』に従って、等活、黒縄、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、阿鼻の八大地獄から書き始め、凄惨なる地獄の恐ろしさを文字で表現したのである。それが元となって、鎌倉時代以降、文字通り「六道絵」や「地獄絵」などの絵画として描かれるようになり、文字を読むことができない一般庶民にまでその恐ろしさが伝わった[註7]。

以後、室町期から江戸期になると、熊野比丘尼と呼ばれる勧進尼僧が、熊野観心十界曼荼羅[註8]を携

え、全国を行脚した。熊野観心十界曼荼羅には、六道の世界とともに、亡者が獄卒に様々な責め苦を受ける地獄の凄惨な場面が描かれている。亡者の生前の悪事は、浄玻璃鏡（じょうはりのかがみ）に写し出されそれを見て閻魔王が裁きを加えて六道の行き場が決定される。熊野比丘尼はこのような物語を「事実」であるかのように、臨場感のある絵解きを行ったのである。

十界曼荼羅の中に描かれるものの中で特筆すべきは、僧形の地蔵菩薩の姿である。地蔵菩薩は複数登場し、いずれも地獄に落ちた亡者を救う菩薩として描かれている。

源信の『往生要集』には、日常的に阿弥陀仏を熱心に拝んでいるものは、死後六道輪廻転生から逃れ、極楽浄土へ生まれ変わることができるとされている。都に暮らす貴族や武士階級、また商人などは、時間やお金をかけて、いわゆる作善を行うことができる。しかし、中世以降の百姓や職人、殺生を生業とする漁師などの民衆（庶民）は、生まれて亡くなるまでの年月に仏教に触れることができず、既に殺生など仏門にあってはならないことをしてしまっている前提がある。すなわち、仏教で必ず行わなければならない、経文を唱えることや、それを写すこと、仏像に向かって拝むことなどの作善をすることができない。これら庶民の心を救うには、地獄に一旦落ちても救ってくれる地蔵菩薩を独立させて信仰する必然性があったと考えることができる。

写真９　ミウラ折り熊野観心十界曼荼羅方丈堂出版。熊野比丘尼はこのように、一枚の曼荼羅を折って携行し、全国を歩いて布教した。

中世初期にはこのような仏教説話が、横川から下った浄土教家である僧侶たちによって語られ、近世以降は熊野比丘尼などの勧進僧が、地獄絵の絵解きを通じて、既に殺生をしている庶民の心を救い、作善に向かわせることをしながら、信仰を広め、勧進僧としての生業を続けたと想像できるのである［註8］。

第三章　十王堂に見られるコミュニティ―

（一）下仰木の十王堂に集まる人々

下仰木の十王堂には、地獄が描かれた掛け軸が三幅所蔵されている。現在は下仰木の自治会長が保管されており、年に一度、八月十六日の盆行事の時に堂内に掛けられる。

掛け軸は、表装も比較的新しく、絵画部分の剥落などもなく、内容がしっかりと見える状態であるので、江戸時代の後半か、明治以降に制作されたものかと思われる。今回、取材を受けていただいた東光寺の世話方である山村修三氏に話を伺った。

山村氏が子供の頃から、この十王堂は「じょうど」と呼ばれ、本当に近づくことができない恐ろしい場所であった。浄玻璃の鏡や、罪を秤る天秤棒、悪と善を見極める二つの顔の作りものなども、お盆には出され、掛け軸の前で、地獄に詳しいおじいさんやおばあさんの絵解きを聞いて震え上がったという。地獄の存在を信じて、行いを正す機会となっていたのは間違いないであろう。

「じょうど」と呼ばれていたのは、「十王堂＝じゅうおうどう」が省略され「じょうど」になったと思われるが、閻魔王と並んで極楽浄土の中心仏である金色の阿弥陀如来が安置されているので、「極楽浄土」を意味しているともいえるのかもしれない。

この十王堂を月に一回利用している集まり（コミュニティ）があるということで、令和四年（二〇二二）一月十六日に下仰木の観音講を取材した。

（二）下仰木の観音講

下仰木の観音講は、東光寺飛地境内の観音堂に祀られている千手観世音菩薩を信仰する講として古くからあり、現在は、比叡山延暦寺が主宰する叡山講福聚教会（えいざんこうふくじゅきょうかい）に所属している。

この叡山講福聚教会は、第二次大戦後、精神的にも経済的にも厳しい時代（昭和二十五年）に、精神の安寧と、真の信仰心を取り戻すために結成されたという。

さて、この観音講は、現在十三名の女性たちが所属。年齢は六十代から八十歳過ぎで構成されている。五年前までは、二十三名という人数だったが、観音

堂の秘仏千手観世音菩薩（国重要文化財）の中開帳（二〇一八年）を機会に高齢者が退会されたという。

活動は、毎月十日に、東光寺飛地境内の観音堂にて御詠歌を奉納することと、十六日に十王堂で同じく御詠歌を奉納することで、月に二回必ず集まって約二時間、お経を唱えることから始まり、三十三観音霊場の御詠歌を詠唱し、最後に回向・祈願で締めるという流れになっている。

二〇二二年一月十六日の観音講に参加されていた七名の講員に話を伺った。

「約五十年前に対岸の守山からここ下仰木に嫁いで来ました。先祖代々この十王堂を大切にされてきたことに驚いています。我々もいずれは死を迎えることになるのですが、観音講でお経をあげるなどしながら、仏様にあやかりたいと思っています。正直ありがたいことだと思い続けています。」

「私は下仰木の出身です。幼い時は、この『十王堂』のことを『じょうど』と呼んでいました。お盆になるとこのお堂に入るのですが、ここには閻魔さんがいて地獄の裁きをされ、またその地獄の絵が掛けられています。嘘をついたり、動物を殺したり、ものを盗ったりすると地獄に落ちると教えられました。本当に恐ろしい場所でした。こういう場所、行事は絶やすことなく残してほしいと思っています。」

「高島市の琵琶湖畔で生まれ育ち、この下仰木に嫁いできました。姑さん（義母）がこの観音講を紹介してくれました。観音講のメンバーと知り合いになることができ、早い段階で仲間ができました。感謝しています。」

「下仰木で生まれました。昔は、下仰木集落の人が亡くなると、お通夜を家で行っていました。そこに観音講の皆さんが来られて、ご詠歌を詠われます。今は葬儀場で行うのでその風習はほぼなくなりましたが、懐かしい思い出です。今の観音講は大切な集まりです。しっかり維持していきたいと思っています。」

「姑さんが観音講に入っておられました。当時は、講のお世話などがあり、かたわらで見ていて大変だなと思っていましたが、現在、観音講に参加させていただき、本当に嬉しく思っています。観音講では、月二回、ほぼ二時間にわたってご詠歌を大きな声で詠いあげます。これは健康にとっても本当に良いことだと思い、積極的に参加させていただいています。」

「雄琴の千野集落からここに来ました。当時の観音講は、人間関係の難しさなどもあり、参加するのはどうかと思ったりしていましたが、今では、仏様の前で純粋に拝むことの大切さを感じています。続けていきたいです。」

「仏事など何も知らなかったのですが、この観音講に入ってから、『お逮夜』の意味や、『初七日』や『四十九日』、『百箇日』などの追善供養の意味などを知ること、そしてその行事の大切さなどを知りました。お経も唱えることができるようになり、早くに家族を亡くしている私にとってはこの観音講の存在はなくてはならないものになっています。」

それぞれ講に対する思いを語っていただいた。

仏具、絵画などのモノや風習、教え（思想）など、仏教を中心とした古き良き日本文化に触れ、学びを得ることができる。自分が暮らす地域の人とのつながりを持つことができる。大きな声を出すことで、精神的、肉体的に健康になることができる。など、これからの世の中に必要だとされる要素をそこに感じることができた。

東光寺の志井住職にも同席いただいたので一言お話いただいた。

「現代は様々な楽しみがありますので、なかなかご詠歌を詠うことに興味を持っていただく方が少ないと思います。それでも、中にはこれか

写真10　観音講の様子

らご詠歌を詠いたいとおっしゃる方もおられ、そのような方には月に二回程度ですが練習会を東光寺でさせていただいています。ある程度詠うことができるようになれば、観音講に入っていただこうと思っています。」

と、これからも観音講を続けてほしいと願う大切な言葉をいただいた。

(三) 十王堂から見えてくるもの　今日の追善供養のあり方

さて、もう一度この「十王堂」という場所についての意義や役割について考えてみたい。

はじめに述べたように、十王堂は故人の魂の行末を願って十王の審判をより良いものにしようとするための追善供養と、十王を予め拝んでおいて、自分の未来に祈願する逆修という二つの仏事に関わる象徴的なお堂である。

この二つの仏事を現代において如何に考えるべきかが、現代の寺院における一つの大きな課題となっている。

僧侶で現代の宗教のあり方を研究する松崎慈恵は、著書の中で「少なくともこれまで数百年間、十三仏を本尊として追善供養を行ってきた伝統の意義を軽んずるわけにはいかないが、ただ単に今までどおり続けていけばよいのではなく、人びとがそれについてどう考えているか、あらためて現代においてその意義や役割を見直す必要があるのではないか」と語っている。十王経や源信の『往生要集』に語られた地獄の存在は、確かに十三仏信仰が定着し、広がった中世から近世にかけては、ほとんどの庶民が信じていたであろうし、十王や十三仏信仰に必然性があった。しかし、現代に生きる人々がどのくらい地獄の臨場感を持っているであろうか。十三仏について伝統的なことだけを説いても、法事（追善供養）をしてよかったということにならないであろう。

「日本人の国民性調査」（統計数理研究所、二〇〇八）の調査によると、「あの世」を信じるかという問いに対して「信じる」と答えた人は三十八％であった。「決して無い」「たぶん無いと思う」が四十四％であり、半数以上の人々は間違いなく追善供養の意義をそのまま理解することはできないであろう。

しかし、一方で、興味深い報告もある。日本社会において近代化、産業化が進み、社会システムの機能分化が深化すると、個人主義や核家族化などによって伝統的な風習や祭祀機能が衰えていくだろうと考えられていた。しかし、孝本貢の著書によると、先祖祭祀の風習について各種世論調査の結果、「年に一、二回程度は墓参りをしている」という比率が、一九七〇年から二〇〇八年にかけて六十％から七十％と安定し、微増しているというのである。

その理由としては、「家」という文化的価値から湧き出る先祖祭祀は、一部の社会条件の変化によって失われるようなものではなく、ある程度普遍的要素を持っていることや、祖父母、親兄弟など近しい物故者への「思慕」に基づく意識の変容、もう一つは、先祖祭祀を義務とするような新宗教の現れなどが挙げられる[註8]。

とはいうものの、やはり十王堂に見られる十王の裁きや十三仏によるいわゆる追善供養は、葬儀の日に初七日を合わせて行うことや、その次の供養は四十九日の忌明けまで省略されるのが一般的となっている。伝統的祭祀は残しつつも合理的に行われている事実があり、現在のコロナ禍が伝統的祭祀の省略に拍車をかけているようにも思う。

やはり、新しい時代にふさわしい追善供養のあり方や考え方を持たなければならない。

十王や十三仏信仰、すなわち追善供養は、日本特有の祖霊信仰と仏教の輪廻転生が融合した考え方から生まれた祭祀であり、現代風にいえば死者の魂とつながる一つのコミュニケーションであるといえようか。だが、その祭祀の現場、すなわち寺院で法事が行われている場面を思い浮かべると、普段出会うことがあまり無い親戚縁者が集まっている。確かに、亡くなった人物の魂を弔っているのだが、その仏事が終われば、遠くから来てくれた親類をそのまま帰すわけにはいかないということで、場所を変えて会食が行われるのが通常であろう。会食では物故者を追慕する話から始まるが、あとは懐かしい話や楽しい近況報告の時間になる。これはすなわち血縁でつながるコミュニティなのである。

ある一人の故人の一周忌が営まれた翌年は、違う親類の三回忌が営まれるなどし、年に数回その機会（法事）が訪れることもある。また法事ではなく葬

儀もあろう。血縁のコミュニティは、そういう場面で頻繁に形成されているのである。

核家族化が進むと、都市部に分散した遠くの親戚が集まる機会は、このような伝統的祭祀の場面でしかないといってもよいであろう。これは、先祖が残してくれた一つの知恵であるといえるかもしれない。

下仰木の十王堂に、ある特定の家の親戚縁者が集まるということはないかもしれないが、観音講など、この地域の人々、すなわち地縁で結ばれた人々がここに集う。その時に、十王と出会い、地獄の話があり、追善供養へとつながる。その法事という祭祀の現場では、血縁のコミュニティが形成される。

十王堂は、地縁と血縁というコミュニティの原点につながる大切な場所であるといえるのである。

おわりに（まとめにかえて）

現代社会には「無縁社会」という言葉がある。

近代合理主義が成熟した現代社会では、人とのつながりの煩わしさから逃れて生きることができる便利な社会となった。一方、近世の村社会は、全く逆で、決して一人で生きることはできなかった。農作業などの生業も、衣食住全てにおいて常に集団で行わなければならなかった。そのために、その集団をうまくつなぐための手段として、祭礼や講などが民間信仰の一部として必然的に行われてきた。十三仏信仰に見られる追善供養もそういう意味では、必要であったのだ。

近代社会を迎えると、社会システムにおいて機能分化が進み、都市部においては、全く個人で生活することが可能となり、村社会のしがらみから逃れることができた。人々はそれを自由で、解放されたと考えるようになったのだ。

それが、現代では「無縁社会」と呼ばれ一つの社会問題となっている。孤独死の定義は難しくその統計がとりにくいというが、年間の孤独死の数は三万人を超えているという。数字だけみても、「無縁社会」の到来を感じずにはいられない。

祭りなどに代表される伝統的な行事などは、その地域が持つ固有の大切な文化である。今回取材をした「十王堂」には貴重な地域文化が詰まっている。追善供養や観音講などを受け継ぐことで、地縁や血縁のコミュニティが維持されることになる。すなわち、「無縁社会」という社会問題を解決する一つの糸口であるといえる。現在は新型コロナウイルスの蔓延により、地域の人々が集まりにくい状況が続いているが、かつては、神仏にすがりながら、感染への不安を和らげ、孤独を乗り越え助け合ってきたのではないかと考えられる。

十王堂に内包される文化財、行事は地域の人々をつなぐ大切な役割を持ち、ゆえに今後も大切に守っていかねばならないのである。

最後になりましたが、この取材にご協力いただきました下仰木観音講の皆さん。そして、取材に同行いただいた東光寺住職の志井浩順様、東光寺世話方の山村修三様にこの紙面をお借りして厚く御礼申しあげます。

註

1. 瀬川欣一「無縫塔」『近江　石の文化財』サンライズ出版　二〇〇一年
2. 深田亮三「首切地蔵」『ふるさと仰木　－古老が語る－』仰木史跡会編集・発行　一九九四年
3. 首切り地蔵が安置されていたという場所は、旧道を東に下り、現在の湖西道路を越える歩道橋の手前であったという。その旧道は、明治二十六年に当時の仰木村の玉井縫右衛門村長と北村見吉助役の尽力によって現在の仰木に通じる道が整備されたことによって使われなくなり、現在は全く使用されていない。
4. 田中文雄「中国の死後世界と十王信仰」『十三仏の世界―追善供養の歴史・思想・文化』ノンブル社　二〇一二年
5. 児玉義隆「十三仏石造資料の梵字」『十三仏の世界－追善供養の歴史・思想・文化』ノンブル社　二〇一二年
6. 渡会瑞顕「十三信仰とは」『十三仏の世界－追善供養の歴史・思想・文化』ノンブル社　二〇一二年
7. 加藤賢治「里山の民間信仰　―仰木の地蔵信仰について―」『成安造形大学附属近江学研究所研究紀要』第七号　二〇一八年
8. 泉 武夫・加須屋誠・山本聡美編著　金井杜道撮影『国宝六道絵』中央公論美術出版　二〇〇七年
熊野観心十界曼荼羅は、室町時代末期から江戸時代にかけて各地で活動した熊野比丘尼が携行し、絵解きをしたといわれている絵画である。地獄極楽図とも呼ばれ、平安時代・鎌倉時代に盛んに描かれた地獄図や極楽図に加えて六道絵の系譜から天上・人間・修羅・餓

鬼・畜生・地獄の六道に、仏・菩薩・声聞・縁覚の四聖界を併せて十の世界が描かれている。人の一生と死後の世界についての考え方が臨場感を持って象徴的に描かれ、当時の人々の死生観を醸成した。

9. 小栗栖健治『地獄絵の世界』河出書房新社　二〇一三年

10. 松崎慈恵「現代日本社会における十三仏と追善供養－功利主義的考察－」『十三仏の世界－追善供養の歴史・思想・文化』ノンブル社　二〇一二年